

# 字余り現象の意味するところを問う

毛利 正 守

## 一

萬葉集の和歌において、句中に母音を含むとその句は字余りが許容される。しかし母音を含んでも字余りを生じない、非字余り句もかなり存在する。そこで、ヒナニとアル（鄙にある）といった二文節の接続のし方を眺め、それを参照しつつ字余りと非字余りの現象を、先ずはみていくことにする。

一般の発話（音声上）において、ヒナニとアルとは、その間に音の切れ目がある状態で発音されることもあれば、切れ目がない状態で発音されることもある。その間に音の切れ目があるときは、アは独立していてニとアはそれぞれが一音であり、ニアはそのまま二音（二単位）となる。我々の内省からして、音の切れ目のあるニア（以下、音の

切れ目がある場合は、かりにニアと示す）が一音（一単位）になることはあり得ない。筆者は、前稿で、ヒナニとアルとの二文節間に音の切れ目があるときに、それを単語連続の状態にあるとした。<sup>(1)</sup> 萬葉集の和歌にあって、音の切れ目のある状態で誦詠されるものが文字表記として実現すると、字余りを生じない、即ち非字余りとしてあらわれりと把握した。

発話において、それではニとアが二音のままではなく一音になるのは、如何なる場合においてであろうか。蓋し、それは音の切れ目のない状況において起こるとみてよからう。両者間に切れ目があつてニとアは二音のままであることが内省上、確かに言えるとき、一音になることがあるとすれば、それは切れ目のないときであると言つて誤るまい。ただし、ここで「一音になる」という場合の一音とは、直

ちにニアがナになるという脱落形を意味するものではない。<sup>(3)</sup>しかし脱落の現象もニとアの間に音の切れ目があるときではなく、切れ目のないときに起こる。これも内省上、確かに言えることである。字余りと関わって、「一音になる」というときの一音は、脱落形と同じ値ではないが、しかし脱落形と方向は同じくするものであり、そのことからしても「一音になる」とは、音の切れ目のないときに起こるとみてよい。音の切れ目がないときに、それを単語結合体の状態にあると捉えた。萬葉集の和歌にあつて、音の切れ目がない状態でニアが一音として誦詠されるものが、文字表記として実現すると、字余りとしてあらわれると把握した。

さて、萬葉集の和歌を眺めると、各句に差異が認められ、大きく二つの群に分かれることが知られる。

(a)グループ 短歌第一句・第三句・第五句、及び長歌

五音句・結句、旋頭歌第一句・第三句・

第四句・第六句

(b)グループ 短歌第二句・第四句、及び長歌七音句、

旋頭歌第二句・第五句

(以下、短歌でもって説明を加えることにする)

(a)グループの短歌第一・三・五句は、句中に母音を含むと、文字上、ほとんどが字余り形として実現しているグループである。(b)グループの短歌第二・四句は、字余り形もある

が、より多く非字余り形として実現しているグループである。

右の句毎の在りよう(a)グループ、(b)グループ)に対して、更に注意深く眺めると、「句中の母音の位置」が関わって、さらなる基準を見出すことができる。

それは、(b)グループの短歌第二・四句において、句中の五音節目が重要な位置にあり、その後で大きな差が認められるというものである。「五音節目の第二母音」より前に母音が位置すると、文字上、字余りになるものは少なく、一方、「五音節目の第二母音」以下に母音が位置するとほとんどが文字上、字余りとなつてあらわれており、その在りようはまさに(a)グループ(第一・三・五句)と同じ様相を呈している、というものである。具体例を示すと次のごとくである。

短歌第二・四句

「五音節目の第二母音」以前に母音あり ほとんど

が非字余り

ひとひもいもを「比登比母伊毛乎」

(15・三六〇四④)

いつしか一あけむ「伊都之可安気牟」

(18・四〇三八②)

さやけく一おひて「佐夜気久於比呂」

(20・四四六七④)

こころ一おもほゆ〔許己呂於毛保由〕

(18・四〇九五②)

うま一うちわたし〔馬打和多思〕(4・七一五④)

「五音節目の第二母音」以下に母音あり ほとんどが字余り

いちしろくいでぬ〔伊知之路久伊泥奴〕

(17・三九三五④)

ながみにかあらむ〔奈我美尔可安良武〕

(15・三六八四②)

ながはまのうらに〔奈我波麻能宇良尔〕

(17・四〇二九④)

うつろふときあり〔宇都呂布等伎安里〕

(20・四四八四②)

うきつのなみおと〔浮津之浪音〕

(8・一五二九②)

〔くい・かあ・のう〕などをかりに小字で記すが、それはクイなど本来、二音のものが一音であることを示す<sup>(4)</sup>

「五音節目の第二母音」前後のものをとり入れて(a)・(b)グループを分類し直すと、次のようになる。

A群 短歌第一・三・五句、及び短歌第二・四句の

「五音節目の第二母音」以下の箇所と、長歌五

音句・結句、及び長歌七音句の「五音節目の第

二母音」以下の箇所

B群 短歌第二・四句の「五音節目の第二母音」以前

の箇所、及び長歌七音句の「五音節目の第二母

音」以前の箇所

A群は、句中に母音を含んで字余りになる割合がおよそ94%である。対してB群はその割合がわずかに18%に留まる。以前の拙論と同じく本論でも、(a)・(b)グループよりも字余りと非字余りの実態をよりよく示すA群・B群の分類を採用することにする。

これらA・B群の実例の一端は次のごとくである。

A群 ほとんどが字余り

ただにあはず〔多陀尔阿波須〕(5・八〇九①)

なけといひし〔奈家等伊比之〕

(18・四〇五〇③)

いへをしぞおもふ〔伊弊乎之曾於毛布〕

(17・三八九四⑤)

うなはらのうへに〔宇奈波良乃宇倍尔〕

(20・四三三五④)の「五音節目の第二母音」以下)

B群 ほとんどが非字余り

よは一あけぬらし〔欲波安気奴良之〕

(15・三五九八②)

いぎ一うちゆかな〔伊射宇知由可奈〕

(17・三九五四②)

すすき一おしなべ〔須々吉於之奈倍〕

(17・四〇一六②)

みずてや一いもが〔美受豆也伊毛我〕

(20・四四三九④)

A群は、文字表記において、句中に母音を含むもののほとんどが字余りをきたすものである。萬葉集にあつて、一般に短歌は五・七・五・七・七と五七調で、定型化されていると言えるが、句中に母音をもつものが字余りをみ、とりわけA群は母音を含むものの94%までが字余りであり、その数はおよそ一四五〇例余りにも及ぶ。萬葉集での定型といった概念が、仮に文字表記に適用されるものであれば、これら母音を含むものが一四五〇余例にも及んで五が六に、七が八などと定型を乱していることになる。句中に母音を含まない句は原則的にそのまま五・七の定型であり、母音を含むものに限って、しかも母音を含むものばかりがかかる数に及んで定型を乱していることになってしまい、それは考え難いことである。定型は文字にあるのではなく、次に述べるように、音声上・誦詠上にあると捉えてよい。

ヒナニとアルにおいて、音声上、ニとアが音の切れ目のない結合度の高い状態で一音（一単位）になると捉えるとき、ニとアは本来は二音であるけれどもそれが一音となるので、一音となったニアを含む、たとえば「ひなにあるわれを」〔比奈尔安流和礼乎〕（17・三九四九②）などの句は、母音を含まない「むなしきものと」〔牟奈之伎母乃等〕（5・七九三②）などの句と同じ値になり乱れていないことになる。文字上は二文字（ニア）であっても、音声上、一音としてある句は乱れない定型ということになる。言い換えれば、誦詠上の単位における等価性を有しているということである。

なお、こうした現象を説く際に、音の切れ目のない単語結合体のものは字余りとなり、音の切れ目があり単語連続のものは非字余りになると説明し、今度、A群（ほとんどが字余り）を説明する段になって、A群の六音・八音は、音声上、音の切れ目がなく単語結合体の状態であったから、字余りになるのだなどと説明するならば、それは論が循環していることになる。筆者はそのように説くのではない。いま、前稿で述べたことを簡単にまとめて言えば、先ずB群は、基本的に脱落現象と同じ方向またはそれと近い関係にある文節と文節とが接続する場合（B群での字余りは、ニアリ〜ナリ、トオモフ〜トモフ、トイフ〜トフなどの脱

落形と同じ形態のもの、及び句中にやはりアリ・オモフ・イフを含むもの、また母音を含む複合語等に認められる)に限って、音の切れ目がなく単語結合体の状態にあり、一方、自立語と自立語が接続する場合(ヒバリアガリやスキオシナベなど)等は、一般の発話ではその間に音の切れ目があり単語連続の状態になることが我々の内省によって知られるが、こうした自立語と自立語との接続等にあつては、B群はまさに一般の発話と同じく、音の切れ目がある単語連続の状態で詠まれたと考えられる。B群は総じて一般の音韻現象を反映するかたちで存在していると言え、それが文字上に字余りと非字余りとなつてあらわれていると言える。対して、A群は、脱落現象と同じ方向をもつ文節間以外の形態のもので音の切れ目なく単語結合体としてあり、そのために一般の発話では二音で発音されるものまでが一音となる状態で詠まれ、それゆえに、文字上には字余りが字余りとなつてあらわれていると考えられる。言い換えれば、A群では単語結合体と単語連続の相違に関係なく必然的に字余りになるというのではなく、A群自体は一般の発話では二音であるともみられるもので、単語結合体の状態で詠まれ一音となるゆえに、それらがいずれも字余りをきたしているということである。

ここでA群の用例をつけ加えて、具体的に説明しておく

ことにする。

A群(短歌第一・三・五句) 字余り

いのちあらば「伊能知安良婆」(15・三七四五①)  
 ひばりあがり「比婆理安我里」(19・四二九二③)  
 こころいたく「許己呂伊多久」(20・四四八三③)  
 なりにてあらずや「奈利尔豆阿良受也」  
 (5・八二九⑤)

つまおもひかねて「追麻於毛比可祢豆」

(15・三六七八⑤)

ゆきあしかりけり「由伎安之可里家利」

(15・三七二八⑤)

しくしくおもほゆ「思久思久於毛保由」

(17・三九七四⑤)

こふるひおほけむ「故布流比於保家牟」

(17・三九九九⑤)

いけるしるしあり「伊家流思留事安里」

(18・四〇八二⑤)

かぎりなしといふ「可芸利奈之等伊布」

(20・四四九四⑤)

A群は、B群と違って、右のイノチとアラバや、ヒバリとアガリ、ツマとオモヒカネテ、コフルヒとオホケムなど自立語と自立語等の接続までが字余りをきたしている。これ

らが文字上、字余りをきたすとは、たとえばヒバリアガリで説明すれば、独立した自立語としてのヒバリのりと、同じく独立した自立語のアガリのアとが音声上、音の切れ目なく単語結合体の状態にあつて一音（一単位）で発音されたことを意味する。言うなれば、「雲雀上ひばりがり」がかりに表記してみればヒバリヤガリというように、リアがリヤの如き一音として発音されることである。また「生いける験しるしあり」がイケルシルシヤリと、シアがシヤの如き一音として発音されることである。あるいは、自立語だけでない字余り形「さけにうかべこそ」「左ひ氣き爾に于て可倍許曾」（5・八五二⑤）〈酒に浮かべこそ〉などもサケニユカベコソとニウがニウの如き一音として発音されることを意味する。これらリア・シア・ニウなどが音声上、一音（かりにリヤ・シヤ・ニユ）で発音されないならば、前述のごとく母音を含む句ばかり（A群で言えば、一四五〇余例）が定型を破っていることになるからである。現代語の発話でも、また通時的に発話の状況を想定してみても、こうした二音が一音となってしまうことは通常はあり難いことだと言つてよい（我々の発話にあつて、ある拍子〈具合〉でそのような発音になる場合があるが、文字上に、結果としてほとんどが文字が余るかたちであられるこれらA群の字余りは、ある意味で、そのような発音になつているものである――

ただし、たとえばヒバリヤガリのリヤの音の長さがいかほどのものかは別にして――と言つてよからうか。とくにA群とB群の結合度の高さや低さを言語構造の相違、また、はじめから同じ構文的関係をもつと規定してみているのではなく、誦詠のし方が両群の違いとなつてあらわれているということである（この点、更に後述）。やはり一般の発話（会話）では、ヒバリとアガリ、シルシとアリ、あるいはサケニとウカベとの間には音の切れ目があり、単語連続の状態にあつてりとア及びシとア、ニとウなどはそれぞれが一音で発音されていると言つてよい。しかし、A群とはかかる二音のもの（右のリア、シア、ニウなど）までがいずれも一音で詠まれているといった一群なのである。A群は、一般の発話とはいかほどかけ離れた詠まれ方がなされていたのであらうと想定される。一方、B群は、ニアリ〈ナリといった一般的に起こる音韻現象としての脱落、及びその脱落に近い状態にあるといったニア（リ）などに限つて一音になつており、A群でみるようなヒバリアガリの如き自立語と自立語との接続等では一音にはならず、B群全体は音声上、A群よりは一般の発話に近いかたちで詠まれたのであらうと想定される。なお、B群及びA群を論じる際、このように「一般の発話」との関係で右に述べているが、これについては、以前、「萬葉集の詠まれ方及び

当時の発話がどちらもそのまま復元できないとき、また、歌である以上、それは一般の発話とは異なっているであろうと推測もされるとき、その両者の関係を安易に比較することは慎しまねばならず、そのことを十分認識した上で、しかも本稿では、歌の詠まれ方と発話のあり方が同等・同質か否かなどといった設問のし方をするのではなく、通時的に見ても一般の発話が切れ目を持たず、のべつ幕なしという状態で話されることはなく、適宜音の切れ目を持つことであるが、A群よりもB群の方がその発話のあり方により近く、音の切れ目を持たないA群のあり方が、B群よりもそうした発話からは離れたところにあると把握してよいであろう、ということである」と言及しており、その立場にたつての発言である。

字余りの在りようがA群とB群とで顕著な相違をみせながらも、しかしそれがそのままのかたちで定型に収まっているという事実が重要なことである。とくにA群が、一般の発話で二音のものまでが一音になるゆえに、文字上、六文字でも五音、八文字でも七音であつて、結局のところA群もB群も共に定型に収まるのである。

付言すれば、音声上、単語結合体の状態にあるものが文

字上に字余りとしてあらわれるのであるが、萬葉当時、もちろん和歌は詠まれるだけでなく文字にも記された訳だから、次の点も見逃せない。

誦詠された歌が記されるだけでなく、記された歌がはじめて誦詠されること（記載者以外に、それをはじめて詠む人）もあり、そのとき、文字としては二文字（字余りとしてのニアなど）であるものが、詠む際に、それを一音（一単位）に実現させることが起こる。よつて、音声上、ニアが一音であるとき、それが最初から音声の問題として存する面があると同時に、記された文字を踏まえた上で音声の問題として存する面もあるという、二面性を有するということである。<sup>⑦</sup>

## 二

次に、字余りと関わつて、句中に母音を含む文節のあり方と、含まない文節のあり方とを比較しつつ眺めていくことにする。

(1) たのしくあるべし「多努斯久阿流倍斯」

(5・八三二)⑤

(2) たのしくのまめ「多努志久能麻米」(5・八三三)⑤

(1)と(2)は共に短歌第五句でA群に属し、(1)が句中に母音を含み(2)は母音を含まない例である。基本的に、A群は、

音声上、一句が音の切れ目なく結合度の高い状態で詠まれた一群であった。(1)のタノシクとアルベシだけでなく、母音を含まない(2)のタノシクとノマメ(飲まめ)も同じく結合度の高い状態で詠まれたと見做してよからう。共に音の切れ目のない単語結合体の状態でありながら、しかし(1)の方は文字上、八文字の字余りであり、(2)の方は七文字のままで字余りを生じていない。同じ状況にありながらなぜ(1)が字余りで(2)が字余りでないのか。その場合、(1)が字余りになるのは句中に母音を含むからだ、とひとまず説明できよう。しかしながら、同じくA群に属す母音を含まない、

(3)てにまきてゆかむ「手尔麻伎互由可牟」

(17・四〇〇七⑤)

は、母音を含まないのに字余りをきたしている。これもA群にあって、テニとマキテとユカムの三つの文節は音の切れ目なく単語結合体の状態にあつたとみてよい。字余りはマキテとユカムの間で生じていると考えられる。

さて、(1)のタノシクとアルベシとが単語結合体の状態にあり、その場合にクアがタやノやシ(タノシ)などと同じ長さで発音されたとみてよいとすれば、クアはタやシなどと同じ長さの音(一単位)ということになる。その際、(2)のタノシクとノマメも同じく結合度が高い状態にあるゆえに、(1)のクア同様、クノもタやシなどと同じ長さで発音

されたということになるのかどうか。

(3)の場合、マキテとユカムとが同じく結合度の高い状態にあり、しかも字余りを生じているので、音声上、(1)のクア同様、テユもマやキなど(マキ)と同じ長さの音(一単位)ということにならう。とすれば、母音を含まない(2)のクノもタやシなどと同じ長さで発音されたと考えて差し支えないが、そうであるとして、異なるのは、(2)の場合には字余りを生じない、ということである。

右の三者(1)〜(3)にみる様相を、それではどのように把握したらよいか。

いま、(1)のクアも(2)のクノも(3)のテユも同じ長さで発音されたという立場で眺めるとき、萬葉集中、(1)のように句中に母音を含むものが最も多く字余りを生じており、次に(3)の半母音(ユ)を含むものがそれに続き(用例数は母音のものに比べて少ないが)、母音や半母音を含まない(2)の如きは、原則として字余りを生じることがない。このことに鑑みて、クア、クノ、テユが同じ長さで発音されたとしても字余りを生じるか否かはその発音の長さだけでなく、<sup>(8)</sup>字音の有無が大きく関わっていると見てよい。

従来、五十音図の音節のうち、ア・イ・ウ・エ・オの母音だけが子音音素を有しないように考えられてきたが、服部四郎氏は、カ行以下ではなく五十音図のいずれもの音節



に子音音素があると考え、ア行にも母音の前に子音音素にあたる有声喉音音素/ʎ/があると想定された。単語のうち、たとえば、「あか」(赤)の語頭の「あ」や、音の切れ目をもつ単語連続の状態にある「あかあか」(赤々)の三音節目の「あ」には有声喉音音素があり、/ʎaka/ /ʎakaka/と示すことができる。また音の切れ目のない単語結合体の状態にある「かあど」(カード)や「おかあさん」(お母さん)などの「あ」は、その有声喉音音素は落ちて、/kaado/ /okasan/と示し得る。母音の前の有声喉音音素の/ʎ/は/ka/ /ta/などの子音音素/k/ /t/よりも落ちやすい(脱落しやすい)ものであった。

さて、実際、我々の発話において、「お母さん」の「ア」もって、アカやアタマ(頭)などのアを発音しようとしても間が抜けたような音となってしまう、発音し難い。服部氏の発言のあと、亀井孝氏も、ハ行にある喉音の無声音素/h/と対比して、母音には有声喉音音素/ʎ/があることを認められた。母音の前に/ʎ/を想定する考えは卓見というべきである。

萬葉集にあつて、音の切れ目がなく同じ単語結合体の状態にあつても、音声上、(2)「たのしくのまめ」のクノ/kuno/の/n/は落ちることはなく、従つて結合度が高くてもクノは二音のままであり、一方、字余りである「伊弊

尔由伎豆」(5・七九五①)や「流去而」(10・二三二〇③)なども同じとみてよいが、半母音音素は半母音ゆえに落ちることがあつて、(3)「まきてゆかむ」のテユなどは一音となり(テユ/teju/の/j/が落ちて/te/になるのか、または/j/が/i/となつて/i/が落ちて/tei/になるのか)であろう。あるいは後者か、とくに母音の場合は結合度の高い状態で有声喉音音素が落ち、(1)「たのしくあるべし」のクアは/kuʎa/ではなく、一音としての/kuʎa/となるのである(詳しくは前稿を参照されたい)。

(1) (3)は文字上は七文字・八文字と異なるけれども、音声上はいずれも七音であつて定型である。

以上、一句中、母音(また半母音)を含む句と含まない句とがいずれも同じ音の切れ目がない状態で詠まれながら(なお、右にクアやクノ、テユの音の長さがタヤシ、テナなどの音の長さと同じであるという立場でみてきたが、現時点でそのことを知るのには困難であり、あるいは同じ長さでないとしても、結局のところ、重要なことは、クノに対して、クアやテユは一音(一単位)で発音された、という事実である)、なぜ母音を含む場合(半母音の場合にも)に限って文字が余るのかを、「母音」(また「半母音」)及び「子音+母音」が音声上もっている性質からその理由を考えた。

次にB群について、更に分析を加えたい。A群自体は一句全体が音の切れ目がない状態であったが、B群は音の切れ目もある一群であった。その切れ目は、はたして一句中いくつあるのであろうか。

B群にあつて、いま「活用語の連体形+母音からはじまる体言」を眺めてみると、両文節間は音声上、音の切れ目がある状態にあつたと考えられ、訓字例をも含めて基本的にいづれもが非字余りであらわれている。このことに基づいて言えば、母音を含まない同じ形態のものも音の切れ目がある状態にあつたとみてよい。

動詞連体形+体言

たびゆく一あれは〔多妣由久阿礼波〕

(20・四三二七④)

たびゆく一ひとを〔多妣由久比等乎〕

(15・三六三七②)

よする一いそみを〔余須流伊蘇未乎〕

(17・三九六一②)

よする一しらなみ〔余須流之良奈美〕

(18・四〇九三②)

たつ一あまぎりの〔立雨霧乃〕

(12・三〇三六④)

たつ一つきごとに〔多都追奇其等尔〕

(15・三六八三④)

なく一あしたづは〔鳴蘆多頭者〕(6・九六一②)  
なく一しまかげに〔奈久之麻可気尔〕

(15・三六二〇④)

「形容詞連体形+体言」及び「助動詞連体形+体言」も対比して示しておく。

形容詞連体形+体言

いやしき一あがみ〔伊夜之吉阿何微〕

(5・八四八④)

いやしき一やども〔伊也之伎屋戸母〕

(19・四二七〇②)

きよき一いそみに〔伎欲吉伊蘇未尔〕

(17・三九五四④)

きよき一かはせに〔伎欲吉可波世尔〕

(15・三六一八②)

助動詞連体形+体言

さける一あしびの〔左家流安之婢乃〕

(20・四五一三④)

さける一さくらを〔佐家流佐久良乎〕

(17・三九六七②)

たたせる一いもが〔多々勢流伊毛河〕

(5・八五五④)

たたせる一こらが〔多々世流古良何〕

(5・八五六④)

さきたる一うめの「開有梅之」 (3・三九八②)

さきたる一そのの「佐吉多流僧能」と

(5・八一七②)

B群にあつて、このように活用語の連体形と体言との間には音の切れ目がある。このことを踏まえて言えば、次のB群の例は一句中に二つの切れ目があつたと言つてよからう。

こぬときあるを「不<sub>レ</sub>来時<sub>有</sub>乎」 (4・五二七②)

これは句中に母音アを含んで非字余りであり、トキとアルとの間に音の切れ目がある。またコヌとトキとは「助動詞ズ」の連体形又「体言」であり、このかたちは右の諸例と同様、

いとほぬ一いもを「伊等波奴伊毛乎」

(15・三七五六④)

みだれぬ一いまに「不<sub>レ</sub>乱伊間尔」

(10・一八五一④)

ふらぬ一あめゆゑ「不<sub>レ</sub>零雨故」 (7・一三七〇②)

ゆかぬ一まつらち「由加奴麻都良遅」

(5・八七〇②)

みぬ一ひさまねみ「見奴日佐麻祢美」

(17・三九九五④)

みぬ一ひときなく「弥奴比等吉奈久」

(19・四二二一④)

の如く音の切れ目があるときとみてよい。とくにミヌヒサマネミ(見ぬ日さまねみ)・ミヌヒトキナク(見ぬ日時なく)などは二音節のミヌに体言が続く例であり、コヌトキアルヲにおける二音節のコヌにトキ(体言)が続くあり方と同じである。このことからすれば、

こぬ一とき一あるを

の如く、一句中に音の切れ目は二ヶ所存すると捉えてよい。

あふよあはぬよ「相夜不<sub>レ</sub>相夜」 (4・五五二④)

これはいかがか。句中に母音アを含み非字余りであり、ヨとアハヌの間に音の切れ目がある。また動詞連体形アフに体言が接続するものは、B群に、

あふ一よしもなし「安布余志勿奈子」

(5・八〇七②)

あふ一ものならば「安布毛能奈良婆」

(15・三七三一②)

などとあり、これらも、音の切れ目があるとみてよく、アフに体言ヒが続く右当該例も音の切れ目があつて、この一句も、

あふ一ひ一あはぬよ<sup>13)</sup>

と二ヶ所の切れ目があつたと捉えてよい。B群で、母音を

含んで二音節目と三音節目の間に音の切れ目がある例は多くはないもの、

よは一あけぬらし「欲波安気奴良之」

(15・三五九八②)

たは一うゑまさず「田者宇恵麻佐受」

(15・三七四六②)

わが一うちゆかば「和我字知由可波」

(18・四〇四四②)

めし一あきらめめ「見為安伎良目米」

(19・四二六七④)

等と存するので、この位置で音の切れ目があるとするのは不自然でない。なお、コヌとトキとアルヲ、アフとヒとアハヌヨなどの間の音の切れ目は、それほど長くなくてもよく、前述の一般の発話における「あかあか」(赤々)のアカとアカの間と同じ程度でアが独立するほど(˘aka˘aka)のものともて差し支えない。次の諸例も切れ目は二ヶ所とみてよからう。

わたる一せ一おほみ「和多流瀬於保美」

(17・四〇二二②)

うき一こと一あれや「厭事有哉」

(10・一九八八④)

なく一よの一あめに「奈久欲乃雨尔」

(17・三九一六④)

なく一をのうへの「鳴峯乃上能」(8・一五〇一②)

なに一おふ一よごゑ「名負夜音」(11・二四九七②)

ける一きぬ一うすし「著衣薄」(6・九七九②)

ぬる一よを一おちず「眠夜乎不落」

(13・三二八三④)

やな一うつ一ひとの「樛打人乃」

(3・三八七②)

以上、B群での音の切れ目は一ヶ所のものが多いが、二ヶ所のものも存在すると把握される。B群において、音の切れ目が一ヶ所だけでない点、とくに注意を喚起しておきたい。

### 三

一句中に、ある語と母音からはじまる語とが接続するとき、同じ構文的な関係になる句がいくつかみられる。その典型的なものが同形である。その同形のもものが同形でありながら字余りになるものと非字余りになるものとに分かれる。このあり方についてみておくことにする。

ひたへとおもへば「比多敷登於毛敷婆」

(14・三四三五⑤)

みむとおもへば「見牟登於毛倍婆」

(20・四三〇〇④)

トオモヘバという同形でありながら前者が字余り、後者が

非字余りである。同形であるのになぜ両形があるのか。こうした例はトオモヘバのかたちに留まらず他にも少なからず認められる。

先ず、なぜ両形に分かれるかを問う前に、確認しておかねばならないのは、句の中でアットランダムに両形が存するのかどうか、である。実は、このトオモヘバも短歌第五句即ちA群にある前者の方が字余りであり、第四句即ちB群にある後者の方が非字余りであつて、次の諸例からも知られるように、結局、同形ではあつても字余りと非字余りはA群とB群とで大きく分かれるのであり、この事実はとくに留意されねばならない。

くシアリ

A群 字余り

とりにしあらねば「鳥尔之安良祢婆」

(5・八九三⑤)

いもにしあらねば「伊母尔志阿良祢婆」

(20・四三五一⑤)

こひしくしあらば「古非之久志安良婆」(19・四二二)

一②の「五音節目の第二母音」以下に母音あり

かくしあらば「加久之阿良婆」(5・八一九③)

B群 非字余り

またくし一あらば「麻多久之安良婆」

しらずし一あらば「之良受之安良婆」  
(15・三七四一②)

あひてし一あらば「安比互之阿良婆」  
(17・三九七六②)

はへてし一あらば「令<sub>レ</sub>蔓之有者」  
(20・四三二四④)

くソ(ツ)オモフ

A群 字余り

いへをしそおもふ「伊弊乎之曾於毛布」

(17・三八九四⑤)

ながくとそおもふ「奈我久等曾於毛布」

(20・四四九九⑤)

おのがとそおもふ「己我跡曾念」(7・一三四八④)  
の「五音節目の第二母音」以下に母音あり

くだけてそおもふ「破衣念」(11・二七二六④の「五音節目の第二母音」以下に母音あり)

B群 非字余り

ものをそ一おもふ「物能乎曾於毛布」

(14・三五一一④)

ゐてもそ一おもふ「居毛曾念」(11・二五五〇②)

ものをそ一おもふ「物乎曾念」(2・一二五④)

くノウラ

A群 字余り

たましまのうらに「多麻斯麻能有良尔」(5・八六三)

②の「五音節目の第二母音」以下に母音あり)

ながはまのうらに「奈我波麻能字良尔」(17・四〇二)

九②の「五音節目の第二母音」以下に母音あり)

あごのうらに「安胡乃字良尔」(15・三六一〇①)

B群 非字余り

ふせのうらそも「布勢能字良曾毛」

(18・四〇三六②)

まつらのうらの「麻都良乃于良能」

(5・八六五②)

いそみのうらゆ「伊素未乃字良由」

(15・三五九九④)

くノウミ

A群 字余り

いはみのうみ「石見乃海」

(2・一三一、長歌五音句)

いはみのうみ「石見之海」

(2・一三九①)

B群 非字余り

いはみのうみの「石見之海乃」

(2・一三五、長歌7音句)

いなみのうみの「稲見乃海之」(3・三〇三②)

このように同形でも基本的にはA群が字余り、B群が非字余りである。同形でなく、同じアリを含む句であっても、A群ではやはり「ながみにかあらむ」「奈我美尔可安良武」

(15・三六八四②)の「五音節目の第二母音」以下に母音あり、「さはりあらめやも」「佐波里安良米也母」(15・三五八

三⑤)の如く字余りとなっており、B群では「かずに一

あらぬ」「可受尔母安良奴」(15・三七二七②)、「こころ一

あるごと」「心在如」(4・五三八④)の如く非字余りとな

っていて、同じ構文とか同形が問題になるのではない。字

余りと非字余りとは、同形のものであれ同形でないもので

あれ、そうしたことは関係なく、A群とB群とで顕著な

相違をみせるのであり、その事実が重要なのである。

繰り返し、B群のマツラノウラノ(非字余り)とA群の

タマシマノウラノ(字余り)の例で説明すれば、B群のそ

れは文字上も音声上も七であって定型である。A群のそれ

は、文字は八文字、しかもし音声上も八音ということ

であれば、文字上だけでなく母音を含む句ばかりが前述のご

とく一四五〇余例(A群)にも及んで定型を乱しているこ

とになり、この例も乱れていることになってしまふ。

一般の発話と同じくB群ではノウ(ラ)は音声上、音の

切れ目のある状態にあつて二音であるゆえにそのまま定型

であるのに対して、A群ではノウ(ラ)が一般の発話とは離れた音の切れ目のない状態で発音されるゆえに一音となり、よって、A群のこの一句も音声上、七音であつて定型に収まるということになるのである。このように字余りと非字余りとは、言語構造そのものの相違やはじめから同じ構文的関係をもつと決めてかかるのではなくて、環境(A群とB群)が違つたためにその両者の異なりがあるということである。更に、音韻現象(脱落現象)及び散文のあり方との関わりについても前稿で述べたので、ここにその要旨を記しまとめておくことにする。

A群はそのほとんどが字余りを生じる一群であり、B群は字余りが限られる一群であつて、字余りにはA群のみで起こる字余りと、A群ばかりでなくB群でも起こる字余りとの二様があると言える。前者の字余り(A群のみのそれ)は脱落形を伴うことがなく、後者の字余りには脱落形を伴うといつた顕著な相違が認められる。脱落を伴うか否かで字余りは二通りに分かれるのである。橋本進吉が字余りは脱落と同じ条件の下にあると説いたのは、まさに後者の字余りを指すと言つてよい。A群は、基本的に結合度を高めて詠まれる一群であり、そのことによつて起こる字余りは、それゆえに脱落を生じることがないと考えられるのであり、一方、後者の字余り(B群でも起こる字余り)の

中には、萬葉集ばかりでなく更に散文(宣命など)においても脱落形の存することが窺える。

萬葉には、同じ字余りであつても、このように脱落形と共存しないそれ(A群のみの字余り)と、共存するそれ(B群でも起こる字余り)とがあると言えるわけだが、その場合、A群のみに現れる字余りに脱落が伴わないのは、そのこと自体、いま触れるようにその字余りが脱落と同じ条件の下にあれば脱落が現れてもよいわけだから、その条件の下にはなかつたと言える。しかも脱落形は散文にも認められるので、脱落を持たないA群のみの字余りは、原則的に和歌ゆえに起こる現象(A群・B群と発話とのあり方については前述)、和歌ゆえの臨時の現象であつたとみてよく、臨時の字余りゆえに一般の音韻現象として起こる脱落形をもつことがなかつたと考えられる。字余りと非字余りは、一句の文字数としては異なるが、文字そのものの記し方や仮名字母などは何ら異なるところがなく、同じく脱落を伴う字余りと伴わない字余りも、文字上及び表記上何ら異なることなく存在している。しかし、その字余りには、和歌ゆえの臨時の現象としてのそれと散文の脱落にも繋がる現象としてのそれとの両様が内包されていたと捉えることができる。

散文において、「字余り」現象が存在するかを問えば、

それと否と答えねばならない。散文に反映される実際の発話による口頭語で、字余り現象そのものはあり得ないからである。即ち、「字余り」という言い方は、あくまで和歌にあつて単位が限定されることを内包したときの謂いである。一般の発話では何単位かで区切つて話さなければならぬといつた制限はないから、一般の発話に「字余り」そのものはあり得ない。しかし、散文にも脱落現象が存するとき、口頭語でも結合度の高い単語結合体はあつたとみてよい。つまり字余り現象はないけれども、その現象から何単位かで一区切りといつたような単位の制限をとり去つたところの単語結合体は口頭語にも存在したといふべきである。ただし、そうした単位のこと意識にのぼるのは音数律を問題にする和歌の場合であり、従つて、和歌とは別に、散文では単語連続か単語結合体かは表記上にその違いをあらわすことはなかつたといふべきである（和歌では、表記上、字余り、非字余りとして現れる訳である）。なお、口頭語と散文との関係については以下のように更に留意しておかねばならない。

萬葉當時、和歌は、唱詠に基づきつつ表記される面がなお大きかつたとみられるのに対して、散文、とくに地の文などは口頭語が一旦客体化され、それを經た上での表記となり、和歌が唱詠に基づくほどに、散文は発話（口頭語）

に基づくことは直接的ではなかつたとみられる。従つて、たとえば、ニアリとナリで言えば、発話を離れて既に結果としてあるニアリと脱落形ナリとが選択的に用いられた、ということであつたかと考えられる。更にニアリについて言えば、記された散文では結果としてあるニアリゆえに、単語連続のニアリか単語結合体のニアリかといつた差などというものは表記上にその違いをあらわさなかつたということ以上に、もともとさして大きな問題ではなかつたはずである。ただし、当時、その散文を音声（発話）に再現するときには、脱落形ナリに値の近い単語結合体のニアリとそれとはかけ離れた単語連続のニアリとの二形態が再現されたものかと推定される。それにしても、字余りと脱落との関わりで言えば、基本的にA群のみの字余りは臨時的なそれであつて散文の脱落とは距離があり、脱落形をも伴う字余りは、あくまで右に述べる意味においてであるが、散文とも一脈通じるところがあつたと捉えてよからう。

更に、前稿で、「A群は歌ゆえに起こる字余りと語構成上の字余りとが存することになる。これを言い換えれば、語構成上の字余りは、A群やB群を問わずに現れており、こうした群には影響されずにある字余りと言つてよい。一方、群別にみれば、B群の字余りはそうした語構成上の字余り、つまり一般の音韻現象に基づくものがそのほとんど



であり、それゆえに、B群は通常の発話により近いものがあつたと言え、それに対して、A群は、語構成上の字余りばかりでなく、一般の発話では起こり難い字余り（結合度の高いもの）がその大半を占めるといふあり方であり、それゆえに、B群よりもより誦詠上に基づくものであると言えよう。こうした在りようを十分弁えた上で、B群は、より発話に近く一般の音韻現象に基づいており、「A群のみで起こる字余り」のこともあるが、群として言えば、A群は、B群よりも一般の発話とは離れ、誦詠上に基づいているとまとめよからう。なお、繰り返して言えば、語構成上の字余りはA・B群を問わず、そうしたあり方には影響をうけないで起こる現象であるという点は、押さえておきたい」と述べたこともつけ加えておく。なお、本稿でA群はもちろんのことであるが、B群を「一般の発話」と直接関わらせて論じているのではないこと、第一節の後半など前に述べる通りである。

#### 四

萬葉集の和歌において、「二音一拍四拍節」（二音一拍四拍子）という捉え方<sup>19</sup>と字余り・非字余りとの関係について、所定の枚数が尽きるが、一・二触れておくことにする。

短歌第一・三句（A群）には、たとえば「布施於吉豆」

（5・九〇六①）や「可流羽須波」（16・三八一七①）、  
「宇良宇良尔」（19・四二九二①）、「佐安礼天」（20・四三  
四六③）、「開置而」（11・二六一七③）、「採生之」（11・二  
七五九③）、「青馬乎」（20・四四九四③）等がある。二音  
一拍四拍節という把握において、

ふせおきて——  
あけおきて——  
かるうすは——  
つみおほし——  
うらうらに——  
あをうまを——  
さくあれて——

などといった捉え方が考えられるほか、

ふせおきて——  
あけおきて——  
かるうすは——  
つみおほし——  
うらうらに——  
あをうまを——  
さくあれて——

といった捉え方も考えられよう。つまり四拍節の把握の中で、「ふせおきて——」等であれば四拍分（四

音分)の休止(休止または延音)ということになり、「ふせ  
—おき—て—」等であれば三拍分の休止ということ  
になる。どちらも二音一拍四拍節に収まっている。少  
くとも、

こと—とは—ぬ—「許等々波奴 言問はぬ」  
(5・八一①)

なほ—なほ—「奈保々尔」  
(5・八〇③)

などが一文節で詠まれたとすれば、

ふせ—おき—て—  
うら—うら—に—

なども一文節で詠まれたということになる。そもそも五  
音句(第一・三句)で母音を含む「和我伊能知乎」(15・  
三六二①)、「許能安我家流」(15・三六七③)なども  
「わがい—のち—を—」「このあ—がけ—る—  
—」でなくて、

わが—いの—ち—を—  
この—あ—が—け—る—

であっても結局二音一拍四拍節の中に収まることになる。  
五音句に母音が含まれるとなぜガイ(ワガイノチのガイ)、  
ノアが一音として詠まれるかを二音一拍四拍節そのものの  
把握の中で説明が望まれる。関わって、二音一拍四拍節に

おいて延音(休止)がどこに入るのか、何音入るのかも客  
観的に説明されることが望まれよう。

山口佳紀氏が『琴歌譜』をとり挙げて、「歌唱」に対す  
る「律読」を論述される中で、「CV」を二音分にも三音分  
にも延ばして発音してよいならば、音数を五音・七音に揃  
える必要はない、「途中に延音を入れて適宜に拍子を整え  
るならば、句の音数を五音・七音に揃える必要はないはず  
であって、これは飽くまでも音楽的な「歌唱」の姿を示す  
ものと考えられる」と述べられるのは本質をつく重要な指  
摘であり、同時に、たとえば短歌第二・四句は、字余り句  
よりも非字余り句の方が三倍ほど多く存しているのに、

「五音節目の第二母音」以下に母音が位置すると巻五・十  
五・十七など仮名書き六巻だけをみても、非字余りが四例  
に留まり字余りが二五例にも及んでいて、第二・四句なの  
になぜこの位置では六倍強も字余りの方が多くなるのか、  
その辺りのことも、結句(第五句)とも関わらせて二音一  
拍四拍節という捉え方の中で、その理由が説明されるのが  
よいであろう。高山倫明氏に説明があるものの、氏は「五  
音節目の第二母音」のことのみをとり挙げられているが、  
「安比太之麻思於家」(15・三七八五②)、「神曾著常云」  
(2・一〇一④)など「五音節目の第二母音」以下即ち  
「六音節目の第二母音」の例も少なくないので、その点の

配慮が必要であり、更に第二・四句の「五音節目の第二母音」以下に位置する母音の「伎美我久伊豆伊布」(18・四〇五七②)、「等保追可牟於夜能」(18・四〇九六②)、「君尔於是相」(19・四二五三④)等々が、

きみ一がーくいーていふ＝

とほ一つーかむおーやの＝

きみ一にーここーにあひ＝

であるとすれば、後ろへずれていることになる。結句はそこで歌が終わり後ろに縛りがないのでずれてもよいが、第二・四句には後ろに縛りがあるわけだから、結句と同じように後ろにずれることは、問題である。

以上、本論では、萬葉集の和歌において、各句の字余りと非字余りのあらわれ方からして大きくA群とB群とに分かれること、そのA群とB群の在りようは何を意味するのか、B群での音の切れ目のあり方とその切れ目の数の問題、また文節間の接続で同じ構文・同形となるものが基本的にA群で字余り、B群では非字余りであること及びその分かれることの意味、二音一拍四拍節の捉え方への発問等をとり挙げ論述した。大方のご批正を乞う。

## 注

(1) 単語連続及び単語結合体の概念は服部四郎『言語学

方法』(岩波書店、昭43)による。

(2) 拙稿「萬葉集に於ける単語連続と単語結合体」(萬葉100号、昭54・4)、同「古代の音韻現象―字余りと母音脱落を中心に―」(『日本語史研究の課題』武蔵野書院、平13)、同「萬葉集に観る字余りの諸相」(萬葉集研究)28集、平18・11)など。

(3) 注(2)の拙論参照。

(4) 字余り形を「ひなにあるわれを」のように、「あ」だけでなく、二文字「にあ」とも小字にするのは、脱落形「ニアルナル」のようにniaのiの方が落ちることがあり、単語結合体の状態でこうした「にあ」が一音としてあるのは、両母音(この場合、niのiとa)に影響が及ぶと考えられるということによる。

(5) 高山倫明「音節構造と字余り論」(『語文研究』100・101合併号、平18・6)参照。

(6) 注(5)の高山氏の論「音節構造と字余り論」で参考として挙げてある「文献」にはたまたまとり挙げてないが、注(2)の拙稿「古代の音韻現象―字余りと母音脱落を中心に―」などで、こうした傍証にならうかと考えられる点等を記しているので参照されたい。

(7) 注(2)の拙論。

(8) 記された歌と誦詠との関係について、ここにいるA群とB群とのあり方を脱落想定表記の分布から帰納したものに、佐野宏「萬葉集の字余りと脱落想定表記―定型に対する共通了解の観点から―」(『萬葉』193号、平17・

7)がある。また同氏の「歌」を書くための条件について(『国語と国文学』84の11、平19・11)は、ここにいう二面性に関して、記される歌と誦詠との接点を定型の成立に求めたものである。

(9) 注(1)の服部四郎『言語学の方法』

(10) 亀井孝「国語の変遷と歴史」(『国語学』17、昭29)

(11) クアやクノ、テユがタやノやマなどと同じ長さで発音されたといった見方も然ることながら、音の切れ目なく単語結合体の状態で、母音の場合は有声喉音要素が落ちて一音(クア)になるが、「子音+母音」の場合は二音(クノ)のままであったということが重視されてよい。

(12) 注(2)の拙論など。

(13) アハヌに対してヨは「五音節目の第二母音」以下に位置するので、その間に音の切れ目がない可能性が高い。

(14) 山口佳紀「『万葉集』における短歌の字余りと唱詠法——二文節から成る第二句・第四句を中心に——」(『萬葉集研究』28集、平18・11)、同「字余りの様相と唱詠法」(上代文学会秋季大会シンポジウム、平19・11)に既に指摘あり。

(15) 注(2)の拙稿「萬葉集に観る字余りの諸相」も更に参照。

(16) 注(5)の高山氏の論、また注(14)の山口氏の一つ目の論参照。

(17) 注(6)でも述べたが、注(5)の高山氏の論には挙がっていない拙稿「古代の音韻現象」で、A群とB群の

詠まれ方の違いに関して傍証となることを記している。

(18) 注(2)の三つ目の拙論。

(19) 最近の論に、西條勉「定型の原理——詩学史とリズム論の現在——」(『国語と国文学』84の11、平19・11)、同「字余りを許容する定型とは、どのようなものか?」(上代文学会秋季大会シンポジウム、平19・11)、及び注(5)の高山氏の論がある。

(20) 注(19)の西條氏の二つ目の論で、五音句は一文節から成り立っているとの見解が示されている。

(21) 字余り・非字余りを考える際、二音一拍四拍節・二音一拍四拍子での把握には他にもなお問題点があるが、その点については今後更にとり挙げていくことにする。